

数氏の演奏を始め三美会の台湾演奏旅行の報告や雑談芸談などを楽しい半日を送り夕食後散会したが当日微恙や所用のため数氏の欠席会員があまり些か淋しかった。

五洲会演奏会

四月九日(金)夕六時東京上野本牧亭(七〇〇)異国の丘、西村溪俊、薄陽江、山田洲鳳、西郷隆盛、前田洲月、鉢の木、桑名洲聖、茨木、松崎洲陵、伊豆の御難、来賓輝錦司、山科の別れ、同熱海梧水、吉野落、平井洲誠、俊寛、荒川洲帆。

筑前琵琶春の演奏会

第五回定期演奏会を四月十一日(日)正午福岡市立少年文化会館に於て博多旭蝶会主催、県教育委員会その他の後援で開催(三〇〇円)。①君が代、②親鸞様、③菅公、④五條の橋、⑤白虎隊、⑥博多米一丸、⑦雛まつり、さくらさくら、以上嶺旭蝶女史指導で三才から十二才迄の少年少女十数人合奏のあと紘のひびき、嶺旭蝶、尺八賛助、秋風故郷の山、西山旭雲、紘旭蝶、城山、青山旭子、一休禪師、内田旭潮、フイナーレ、ピアノと琵琶、鼓による合奏曲「春」、琵琶旭蝶、旭潮、旭子、旭忍外三氏、尺八鼓各一、立方二。尚筑前琵琶保存会第十二回演奏会は今秋十月十日同所にて開催の予定。

詩吟吟舞神武館道場発表会

四月十一日(日)昼神戸文化ホールに於ける首記で詩吟舞七十番の内女系絵巻(尺八琴立方付)に琵琶三浦蓮水女史併演の外琵琶舞お市の方(立方八人)、同お初の仇討(立方六人)に三浦女史主演。極めて好評であった。

京都琵琶協会の春季演奏会

百花りよりらんの四月十一日(日)正午京都東山安井金比羅宮会館で開催。数年来の春秋に開く演奏会にてこの会場はすっかりしにせがつか、当日もうららかな花日和に恵まれて開会前から聴衆は続々と詰めかけ程なく超満員となり五時の終演まで殆ど席を立つ人もなく大盛況に終結した。因みにプログラムの中五の会員が風邪などで欠演されたのは残念であった。蓬萊山、平井幸生、鴨川の露、一坊寺旭清、安宅、清水旭翠、小松の操、山本嶺舟、舟舟慶、荒木旭媛、白虎隊、牧南水、大楠公、田中鶴水、鉢の木、古谷寛水、若き敦盛、戸倉旭嶺、井伊大老、木下皇水、塚原ト伝、戸田旭公、大原御幸、平井春嶺、西郷隆盛、矢吹旭美津、粟津の露、梅原旭濤、名残りの桜、植村寛水、未練西行、若宮旭登。以上順演のあと関係者約五十人一堂に会し本日の成功を祝して乾盃、目度度く閉会した。

筑前・薩摩琵琶春季演奏会

四月十八日(日)昼松山市民会館、主催愛媛琵琶連盟。(次号詳報)

錦心流琵琶春の演奏会

四月十八日(日)昼名古屋市中小企業福祉会館、主催一水会名古屋支部。(次号詳報)

琵琶吟吟舞発表会

四月二十四日(日)昼京都山一ホール、主催現代琵琶吟吟舞連盟、協賛和鶴会。会主天津八千代女史。(次号詳報)

岡部錦蝶米寿祝賀演奏大会

四月二十九日(日)昼大阪西区民センター、主催錦蝶親族一同、協賛琵琶諸団体(次号詳報)

筑前琵琶演奏会

四月二十九日(日)昼一宮市愛知県勤労会館、主催小川旭典会、後援山崎旭萃会(次号詳報)

NHK・FM琵琶放送

三月十八日(日)夕五時、錦心流花吹雪、荒井姿水女史、外に尺八、琴伴奏の吟詠四題  
四月八日(日)夕五時、錦心流屋島の誉、座間翠水、筑前小栗栖、原島旭粧両女史。

(予 告)

- 浅野晴風大会 五月一日(日)昼一時東京中野駅南口、中野文化センター。一門の外山本鶴声、鈴木流泉、平田田峰、菊水流社中応援出演。
- 京都琵琶協会五月定期茶話会 五月九日(日)昼一時会員梅原旭濤女史宅(向日市西向日鶏冠井町山端二、電話九三二一六九)
- 松本旭柳演奏会 五月十六日(日)昼名古屋市中須中小企業会館。一門の外筑前押川旭葉、錦心流前田秋声阿氏来賓出演。
- 板谷薫氏追悼演奏会 五月十六日(日)昼広島中国新聞社ホール。主催板谷旭邑女史、後援山崎旭萃会。
- 大館洲楓師追悼演奏会 五月十八日(日)東京渋谷谷東邦生命ホール。一門の外松田静水、辻靖剛、小山田賞水、山崎旭萃、雨宮薫水各氏協賛出演。
- 梅原旭濤会の温習会 五月二十三日(日)京都東山安井金比羅宮会館。協賛三美会。
- 紅会(くれないかい)演奏会 五月三十日(日)昼東京日本橋三越劇場。押田旭窈女史外女流名手多数出演。

昭和五十一年五月一日発行(非売品)  
編集者 植村 稟 水  
発行所 高槻市津之江北町一ノ二番  
〒569 電話〇七二六(八五)六〇五一番

琵琶 機関紙

京

紘

第二六三号 京 紘 社

薩摩琵琶とその周辺(四)

北辺を脅すロシア、明治初年の屯田兵、西郷反乱討伐に向う屯田兵、西南の役の総決算



(東京) 坂本 錦 道

千島、樺太、北海道はアジア東端に位する一連の漂島である。その北海道は徳川時代に至って、その全土を松前藩の封領として統治を委ねられていたが、この広大な地域は内地の十一県にも比過する、しかも長大な海岸線で陸地は交通の全く不備、加へて熊、狼の棲家で半年は雪に蔽われ各地に勇猛なるアイヌ族があり、わずか一藩などの手をもってこの未開拓地の藩政が行届くものでない。

十八、九世紀へかけて、ロシアの太平洋に對する南下政策は頓に具体化し、北辺の侵略行動は目立って活発化して来た。その頼みの綱とする松前藩の実体は箱館から江差に及ぶ一本の線に限られ、残余の海岸線はガラ空同然甚だ心細い状態であった。寛政十一年(一七九九)幕府はこの地を松前藩より取上げて新たに箱館奉行を徳川幕府直轄に移し南部、津軽両藩に命じ藩士を駐屯せしめ守護に当らしめた。

さて茲で時代は明治維新となり、新政府が

逸早く手を染めたものは北海道の防備と開拓であった。この過程のよって来るものは、明治六年北海道開拓使次官黒田清隆が、北海道の防備と開拓を力説して屯田兵村制の建白書を時の政府に提出したが、それが直ちに容るる所となり、当時東北地方各藩の旧士族の、迫り来る貧窮を救済する一手段と、北辺の軍事的防備を兼ねた屯田兵村であり一石二鳥の施策であった。之は明治七年よりその実行に入り、三箇年計画として働き盛りの若者のいる旧士族千五百戸男女六千人の移住計画である。その保護策として農地、家屋、銀糧を給し札幌近傍の山鼻、琴似の両村に移住者は今日の福島県地方にあった旧士族の一団であった。

時は春未だ寒き明治十年三月、山鼻、琴似両屯田兵村に時ならぬ非常呼集ラッパを吹き響かせた、例の如く屈強な男子は共同作業かと叫びの中、まさかり、弁当を入れ背中にして週番所前に集合すると、間もなく将校が

現れて二箇中隊を編成し「これから函館(明治期より函館となる)警備に行くから直ちに支度をせよ」と敵かに宣告した。一同は何が何やら薩張り分らぬままに函館に運ばれ、四月七日まで兵式の教練と警備についた。ところが四月二十八日に至って「兵員は九州に出発すべし」と云う命令が下り海路九州へと向う、その船中に於てまた穏かならぬ命令が待っていた、それは鹿児島にある西郷の私学校生徒と之に合流する九州各地より馳せ参じた不平士族の反乱の徒を鎮圧するためであると目的がはっきりした。

この兵員の大部分は十年前の奥羽戊辰戦争に従軍している実戦の経験者である。あの悲壯を極めた戦争の時、官軍の先頭に立った薩長の兵にその一家の祖父兄弟親戚の誰かと殺されたり自害している、その怨恨骨髄に達し更に彼等は新政府要路の榮職を独占し、奥羽列藩を賊軍扱いに一顧だにもせず、今その遺族は北辺兩條たる荒地に鋤を振うこの惨めな対照に、薩摩への報復一念凝って意気軒昂たるものがあつた。

さてこの西南の役に従軍した屯田兵は、まづ四月二十八日熊本県石貫港に上陸、宇土、川尻を経て八代口より人吉攻撃の任に當った。當時はすでに熊本城攻撃に失敗した西郷軍は鹿児島に帰還、一部は人吉によって抵抗を試みたからである。人吉攻撃によって黒田清隆中将の献策にもとづき、敵の背後を衝く別働隊が編成され屯田兵はこの別働隊に編入、

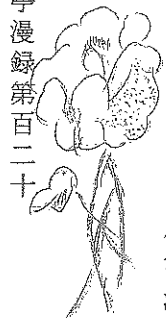
茲で一箇月奮戦し六月一日人吉は陥落、その後屯田兵は鹿見島へ驛足を延ばし、茲で最後の激戦地高鍋の攻撃に当たったが、八月に入るに及んで賊軍全く戦闘力を失うに至る。

この辺からの詳細は勝海舟作「城山」や葛生桂雨作「西郷隆盛」の琵琶歌に記述されているので割愛し、以上をもつて札幌屯田兵は任務を完了し、同月二十一日数箇月ぶりて各自の兵村に帰還したが、この西南役従軍で両中隊に三十七名の犠牲者を出した。

この戦役に参加した官軍の総兵力六万に對し西郷軍は三万と称せられ、この内訳を見ると私学校生徒による訓練を経た精銳一万五千名、残余は不武士その他を合し一万五千となり、西郷軍の戦死者三九〇六名、官軍の戦死者四六五三名と云う、兄弟艦に關くという悲しむべき数字である。この戦役に従軍した屯田兵がいかに強かつたか云う点で、安孫子倫彦氏は左の如く語っている。

私共は熊本八代に五日間滞在した、フロックミタ様を長い紺ラシヤの服をつけ足に鞋、白脚絆といういでたち、土地の者は「はて面妖な？」と不思議な目つきで眺め、それが北海道の屯田兵という百姓兵隊だそうなの、百姓で戦争が出来るかしらんと侮辱したが、実際にやってみると各府県の鎮台兵そこのけの鮮やかさ、近衛兵が屯田兵かと謳われた。

とあるが、僅か十年前に錦の御旗をひるがえした薩兵は官軍の先頭を承り会津討伐したが、



狂醉亭漫録第百二十

小督の局 (二)

古谷 寛水

八月半ばの事なれば、路芝におく露の色、月に玉をや瑩くらん。我ならぬ在原業平が、男鹿啼くこの山里と詠じけん嵯峨のあたりの秋の頃、さこそは哀れに覚えけぬ。片折戸したる所を見附けては、此の内にもやおはすらんと、ひかへひかへ聞きけれども、琴弾く所もなかりけり。打廻り打廻り、二三返まで聞きけれども、我のみ疲れて甲斐ぞなき。内裏をばよにも憑もしげに申して出でぬ、さて空しく帰る参りたらば、中々まゐらざるよりも悪しかるべし、これより何方へも落ち行かばやと思へども、いづくか王土にあらざる、身を隠すべき宿もなし、さて又君の御歎き、誰人か慰め進らせんと思ひければ、只狩衣の袖を絞って良久しくそたちやすらふ。これより法輪(寺)は程近ければ、そも参り給へる事もやとて、そなたへ向きて歩ませ行く。

龜山のあたり近く、松の一叢あるかたに、幽に琴こそ聞えたれ。峯の嵐か松風か、尋ぬる君の琴の音かと覚束なく思ひ、駒を早めて行く程に、片折戸の内には琴をぞ弾き澄ましたる。手綱ゆらへて聞きければ、少しも違ふべくもなき小督殿の爪音なり。奏は何ぞと聞きければ、夫を想ひて恋ふと読む想夫恋と云ふ楽なり。仲国急ぎ馬より飛び下り、やうちやうぬき出し、ちと合はせて立寄り、門をばとぼと叩けば、琴をば弾きやみ給ひけり。内裏より仲国御使に参り侍り、開かせ給へ、御氣色申さん。といへども、答ふる人もなし。良ありて鎖をばつし門をばそめにあけて、いたいけしたる小女房顔ばかり指しだし、人違ひか所違ひか、怪しき賤が庵なり、さやうに内裏より御使賜ふべき所に侍らず。と云ひければ、仲国、中々とかく返事せば門たてて鎖されて悪しかりなと思ひければ、押開けてぞ入りける。

さらぬだに馴れに夜半の眠言は、思ひ出でつゝ悲しきに、雲居の空の月影に、涙の露ぞ置きまざる。仲国が待つらんも、心苦しう思ふらんと思召し、御返事遊ばし打結び、女房の装束一重取副へ、簾の外へ推出さる。御形見かと算えて哀れなり。仲国賜はりて、左の肩に打懸けて申しけるは、餘の御使にて候はば、御返事の上は、兎角申し入るべき身候はねども、内裏にて御琴遊ばされし御笛の役には仲国こそ召されしか、其の奉公をばよも御忘れあらじ、未だ御忘れ候はずば、御返事を直に承つて奏聞申さばや。と聞えければ女房誠にもやと思召しけん、近く居る出でて宣いけるは、さればこそ、そこにも聞き給へる様に、入道(清盛)の世にも怖ろしき事共申すと聞き侍りしかば、難面く存へて我も憂目を見れば、君の御為も御心苦し、何処のいかならん所にて、我が身一人こそ消えも失せなんと思ひ、内裏をば潜かに忍び出でぬ。いかならん洲河にも入り、如何にもなるべかりしかども、住み馴れし人々の行方も聞き今一度君の御言伝をも承ると思ひ、所縁ありてこれに此の程侍りつれども、伝を承る事もなし、思へば中々身も苦し、明日よりして大原の別所に思ひ立つ事候ひて、今夜を限りの名残を惜しみ、主の女房に勧められ、手馴れし琴が忘れられ、今夜も弾きてこそ、安くは聞き知らぬれや。とて泣き給ひければ、仲国も表の衣の袖を絞る許りになりけり。

良ありて申しけるは、大原の別所と承るは、

御様をかへん(御出家)とにや、君の御免されなくては争てか御姿をも替へさせ給ふべき如何様にも重ねて御使は参り候はんずらん、たとひ出でんと仰すとも、左右なく出し進らせ給ふな。と彼の家の主の女房に申し置き召し具したる馬部吉祥を二三人留め置き、彼の家を守護せさせ、我が身は内裏へ馳せ参る。内裏をば亥の刻許りに出でたれども、通夜嵯峨野の原に迷ひつゝ、秋の夜長しと雖も、内裏へ帰り参りたれば夜はほのぼのと明けけり。君は定めて御寝こそなりたるらめ、誰しかか奏しつるべきと思ひ、装束をば驛馬の障子(清涼殿廊下北側にあり)に打懸け、寮の御馬を繋かせて兩殿の方を差廻りて見進らすれば、未だ入御もあらざりけり。夜部の御座にましまし、待ち兼ねさせ給へりと覚えたり。仲国が参るを御覽じて、詩一つ詠せさせ給ひける。

南翔北嚮難風寒温於秋雁  
東出西流只寄瞻望於晓月  
候。とて御返事をぞさし上げたる。

急ぎ披いて観覽あれば、げにも小督の局が手なりけり。あな無慙や未だ憂世にありけるや、何としてか尋ね会ひたりけるぞ。と御氣色ありければ、御琴の音に。と申す。如何なる楽をか弾きつる。とありければ、想夫恋をこそ遊ばされ候ひつれ。と奏すれば、朕が事忘れず、思ひ出しけるにや。とて、又御涙を泣然と流させ給ふぞ哀れなる。(以下次号)



歴史の足跡を追

伏見から山科へ 辻 旭城

京阪電車中書島駅で降りて道を北にとるとあちこちに伏見酒蔵の白壁や格子造りの家並が目につく。その昔、伏見中書島と大阪八軒屋との間には、三十石積みの川船による旅人や荷物の往來は頻繁をきわめたものであった。その面影が昭和の今も、川岸には柳が枝を垂れ趣を添えている。

この酒蔵家並を過ぎると「寺田屋騒動」のあった跡、昔ながらの提灯が掛っている。きしむ階段を気にしながら二階に上がると、そこには明治維新の当時そのまま柱の刀傷もなまなましい。床の間には坂本竜馬の掛軸がかかっている。

寺田屋をあとにして「墨染の里」に足を運ぶ。墨染といえは、いかに世捨人の住む閑静な所のように思われるが、今は全くその面影はない。京阪電車に墨染という駅があり、その附近一帯が往時の墨染の里であるが、現在は駅前には広いアスファルトの道があり、西側には色々の商店が軒を並べる繁華街である。墨染駅を西へ歩いて墨染橋を渡り百米も行

くと、商店の間に墨染桜寺の門がある。境内に豊臣秀吉衣冠の木像があったので有名だが、今はそれもどこにあるのか見当らない。眼につくのは駐車中の車ばかり。行き過ぎ文明の姿をまざまざと見せつけられた。

深草の野辺の桜し心あらば

今年ばかりは墨染に咲け

と、藤原経基の死を悲しんで詠んだ上野嶺雄の歌を思わせる風情などは、もうどこにもない。

物凄く速力で走る車をよけながら十字路を左にとると、百米も行かない所に欣浄寺がある。深草少将がこの地に住み、これより東へ竅道を通って、小野の里の小町のもとへ百夜通いしたのは有名な話である。往時はこの竅道を少将通いの道といい、訴訟の者はこれを避けて通ったという伝説が残っている。

境内に姿見の池があり、西條八十先生作詞の伏見小唄に、通う深草百夜のなさけ、小町恋しい涙の雨は、今も湧きまます欣浄寺」というのがある。

欣浄寺をあとに百米ほど南に歩くと、右側に撞木町遊廓入口の大きい石柱がある。大正七年の建立で、もと遊廓あとの細い道を五十米も行くと、右側に小さい石の碑があり、それには「大石良雄遊興之地」よろづやいと刻まれている。大石は閑居の山科(岩屋寺下の邸)から、裏山の山あいを通って滑り石峠を越え撞木町にやって来たらしいが、道中約八キロばかりの道のりである。

撞木町遊廓入口から街道を越えて真直ぐ東へ出ると、道は大きく迂廻して、さきの欣浄寺表門を通って墨染の駅前になる。

とここで、さきに墨染桜寺の太閤木像のことを書いたが、その太閤さんの引合いに出来る乞食僧桃水という禅僧の墓が、矢張り伏見の仏国寺にあると聞いていたので、ついでだから訪ねようと思ひ、駅前を今度は東に向って広い道を歩き出した。

紋友石橋旭嶺君から、伏見というだけで所在をはっきり聞いた訳でなく、墨染駅から真直ぐに行けばよいと云っていたので、歩けども歩けども一向に寺らしいものがなく、文化住宅やゴルフ場の看板があるだけで、およそ三キロも歩いたところで、娘さんが買物袋を下げて駅の方に行くのに出逢い尋ねると「仏国寺さんですか、そこでしたら真直ぐおいきやすとお寺さんの門がおすえ」と教えてくれたので又元氣を出して歩を進めた。

ようやく辿りつくると寺の人が境内を清掃していたので、桃水和尚の墓を尋ね、本堂裏をちよつと下った所にある古びた墓に詣でた。桃水については昭和三十三年ごろ春秋社から野聖桃水和尚伝が出版され、筆者も図書館で読んだのを覚えていたが、大阪夕陽丘の法岩寺に住んだこともあり、その門前にあった乞食桃水旧跡の碑も今はどうなったか?

仏国寺から八科峠を越えて京阪電車六地蔵駅に出る。駅前からバスで山科の大石神社に参詣し、それから東に行くと岩屋寺、大石良

雄の旧宅跡がある。播州赤穂の城を明け渡し、山科に住む親戚の進藤源四郎から、土地千八百坪と屋敷を譲り受けたのが元禄十四年七月、それから十五年八月迄の一年余りを此処で暮らした後京都寺町に移ったという。岩屋寺には大石の遺品、短冊、四十七士の木像などが保存されている。



我が道を行く 六十五年(三七)

西郷 天 風

浅草の大勝館は日活本社唯一の封切館で、続々と製作される映画は総て此処で封切される。勿論ブームに乗った琵琶劇は毎月製作され、時には琵琶劇でない作品でも、琵琶を入れやすい映画は琵琶劇として発表する有様で一年中琵琶劇は絶ゆることがなく、期間も総て一ヶ月間の上映、好評の為め二ヶ月続映と云うのも稀ではなかった。従って専属の琵琶師が二名あり、いづれも私の旧友だった。君塚篁陵、安田希山の両氏で映画以外の琵琶会にも出演し中々人気を拍していた、この君塚氏は私の琵琶劇出演に並々ならぬ協力者ではあったが、かの大地震の折演奏台から転落し胸を打ったのが原因でその数年の後夭折した惜しむべき紋友だった。

彼は当時本郷森川町に住居し、篁流宗家として後進の指導につとめ、粕谷篁象、粕木篁道、西岡篁村氏等その正宗を今日に伝えおられ、中でも粕木篁道氏は現に正統会のホープとして斯界に名演技を示してゐる。

思えば君塚氏は「吹雪の敵」や「白虎隊」が得意で、さすが堂に入ったものだった、殊に「吹雪の敵」についてはほゞえまじしエピソードが、ありし日の彼を思い出させる。それは彼が初めてNHKから放送の時だった。が随行の愛弟子粕木篁道氏が放送室に這入るべきか否か迷っておるのを見て、入いれと目くばせし、やがて元氣よく唄い出したのはよいが「崩れ」にさしかゝる頃突然咳込んで演奏が乱れ初めた。それと見て取った粕木氏は、演奏台に用意してあるコップの湯を演奏中の口に含ませれば、彼は演奏を続け乍ら巧みに間をつなぐこと数回、かろうじて放送を全うしたという、きわどい逸話を残しておる。その様子は想像するだに面白く、洵に愛すべき性格の持主だった。

私が彼と知り合ったのは大正五年頃で、当時小石川久堅町に住んでいた私は、伝通院前の坂を江戸川べりに降りる中程左側の小高い丘の上に稲荷神社らしい社があり、その神主の息子、古谷篁風の許え弾法の出稽古に通っていた或日、先客だった彼に是非と請われるまゝ立寄ったのが初めてであった。彼の家は小石川砲兵工廠(今の後樂園遊園地)の裡通りで、絵草紙の発行所と云うのか、出版屋と

云うのか、兎に角町工場風の二階家で、店内から階段を昇れば六畳間のナグシからナグシに張り渡した数十本の細紐に印刷直後の絵草紙が一杯に垂れ下げてあり、その下をくぐる様にして行く奥の三畳が彼の居室だった。

私が立寄ったことに満悦の彼は、押入から茶道具を取り出して机の上にならべ、階下から茶菓などをいそいそと運びながら、琵琶を習い初めてまだ日が浅いことや、白山神社境内の清水篁に師事したことなどを物語った。いわば、まだヒョコ時代の時だった、それが数年後にして、大勝館の専属となり、映画琵琶師の先駆者となりすましておったのである。尚この稿をまとめるに当り、久しぶりで粕木篁道氏と談笑の機を得たが、その折たまたま君塚氏の通夜の席の話となり、小田原国尊、西田岳仙、林鶴殿等、錚々たる顔ぶれの前で私が手向けの琵琶を演奏した事など丁度四十年前の思い出を新にした次第だった。

その様を関係にあらた私には、大勝館への出入も裡口の楽屋からであり、従って館の職員は勿論日活本社社員達との交遊も深まりつゝあった矢先、思ひもかけぬよい機会が到来した、それは九州熊本県下の小学校教員数名による社会教育団御々吼会と云う一行が夏季休暇中、富士山麓周辺の講演旅行を企て、堅実を期する為め小学校向の映画二本を日活から借受けたが、その一本が琵琶劇「孝女貞子」と云う教育美談で、私がその琵琶演奏を引受けることになった。

この孝女貞子と云う映画は、浅草のある映画館の常番(従業員のこと)一家の実録物語で、まだ小学校下級生の可憐な少女が、病床の母に代って朝夕通学の前後をシジミ売りにいそしみつゝ家計を助けおる短編物で、映画琵琶入門の為めの練磨研修には最適のものだった。しかもこれ一本に取組む数週間、前轍を踏むような心配が絶対に無いことを思えば、おのづから心はずむのであった。

そこで、東海道は清水港を手初めに、焼津から二ノ宮、富士吉田を経て登山口富士大宮迄の間の各町村等十数ヶ所の小学校中心に、講演と映画の会を催す事二十余回に及び、いづれも講堂を埋めつくす盛況で、なかには、昼夜二回と云うのもある有様だった。

さて其の頃、富士裾野周辺の如き片田舎では、いわゆる「活動写真」と云う「文明の利器」は、人々の噂に聞くことがあつても、実際に見る機会はないと云うのが実情で、稀には新聞社宣伝班が通りがりの折を捕えて、その恩恵に預かる地域もあるとは聞くものゝ、それさえ年に一度もあればよいと云う時代だった。それだけにこの企ては大成功を収め、お蔭で私も映画琵琶師としての修練も充分に積み、一人前となって帰京したのが九月の初めだった。





見直されはじめた琵琶

山崎旭萃さんに聞く

琵琶演奏家の山崎旭萃さんが、本年度の芸術選奨文部大臣賞に選ばれた。さきに、本年度大阪文化祭賞を受けたばかり。再興を目ざす琵琶界に、重ねて灯を点じたといえるだろう。旭萃さんは橋流筑前琵琶橋会の宗範、七十才。高槻市に住む。二十二日の受賞式を前に、その現状と将来などを聞いてみた。

「まず、琵琶の世界にはいられた動機は。」「小さい頃病弱で、医師に『おなかから声を出すことをやってみたら』と勧められたのがきっかけです。十一才でした。当時は琵琶の全盛期で、花嫁修業の一つにもなっていたのですが、關東大震災で橋宗先生が大阪へ移り住まれたことが幸いしました。この方は筑前琵琶を系立てた旭翁師の二男で、橋会の創始者に当たる人、弾法で名人と呼ばれた人です。私の師匠だった旭鳳さんが広島に帰ることになり、私は宗家預かりとして、教授の資格で直門に入れて頂きました。十八才のときでした。」

「随分進歩が早かったですね。」「恵まれていました。ただ、同僚、先輩からの風当りは強く、話しかけようとしてもそ

つぼを向かされるし、白眼視の中で稽古に励みました。師匠の教え方も他の弟子より一段ときびしく、めったにほめられることもなかったのですが、二十才の年の全国大会で始めて『出来た』と声をかけられました。私自身、そのとき以来奏法、語りともなによりや会得できたように思います。」

「もともとは平曲一平家琵琶に始まって、薩摩琵琶がこれを受け継ぎ、明治のはじめ旭翁師が筑前琵琶の流れを創始しました。現在薩摩は正派と錦心流、錦心流から分かれた錦琵琶その他、筑前は直流の旭会と分派の橋会その他からなっています。弾き方や節回しもちがいますが、はっきりした特徴は、薩摩琵琶が総奏で四絃、駒は四つ、搦が大きいのに反して、筑前の方は腹板が桐、絃は四本と五本の二種、駒は五つ、搦は小さくてきています。勢力範囲も薩摩は東京から東、筑前は西に強い傾向があります。」

「さきにお話したように大正期が全盛で、本場の博多などでは軒並み琵琶の音がしたほどです。それが戦後衰微の一途を辿りましたが、三十年頃からやや上向き始め、最近各流派個別の全国大会が開かれるなど組織の確立がみられ、更に現代音楽にも取り入れられて、再認識の機運が高まって来ました。」

随想

馬場 鴨水



「六十の手習」というが、年老いてする芸術の遅々たるものであることを言っている。しかし老年に至って卒然と芸にかかりを持つて人生の終末を飾ることもまた立派である。そのことよって心豊かに老年の日々を送ることが出来る人は幸福であるといつてよい。そのことよって生きる喜びを持ち、生きることに意味を考えることが出来るだけでも尊いことである。

世阿弥の風姿華伝書に「芸能とは諸人の心

を和らげて上下の感を成さんこと、寿福増長の基、遼念延年の法なるべし。」と。

私は去る二月十八日の京都新聞の凡語に目を通した。

「人生五十年といわれたころの方が幸せだったと思う。とかく五十才まで無我夢中でやってこられるが、そのあと生きるのはむつかしいから……。」寂聴尼、瀬戸内晴美さんのことば。

「これからますます人の寿命がのびて壮年から老年までの時間は恐ろしく長くなる。子供との付き合いよりもつれ合いとの付き合いをもっと考えた方がよい……。どんな小さなことでもいいから夫婦の間で楽しみの接点を見つづけること」と作家の田辺聖子さんは提言。私は昨年四月、花の満開に、きのうまで共に花を愛で、春の陽気の中に人生を楽しんでいた妻の急逝に遭い、忽ち独り生活の淋しさに襲われてしまった。早朝の二人連れの川べりの散歩は出来なくなったが、この一年間は毎朝、仏に仕え、仏に接し、祖先とも親愛の情を増し、喜びの最たるものを見出すことが出来た。

また最近では長寿について強く関心を持つようになり、あれこれ健康法のしかも新刊書が読んでいる。老春謳歌Ⅱ長生の秘訣の著者のはじめの言葉に、  
「老年は若い時から積み重ねられてきた生活の知恵が美しく華かに開花する季節である。経験豊かな老人は人間社会の宝である。この

楽しかるべき、そして希望あふれる第二の青春を大いにたええ楽しもうではないか。」

私は早朝の散歩を楽しみ、今日も高野川に満開の日を間近にふくらんだ蕾をながめて、自分の生活を創作しようといふ計らい念じている

(三、二一)

琵琶京都三美会の台湾演奏旅行

矢吹旭美津女史、田中鵬水氏を主軸とする琵琶三美会は、台湾の七絃琴名手梁在平氏の招待で琵琶四人、琴三絃八人、笙一人、一絃琴一人、合計十四人が一団となり、三月二十六、三十一の両日台北、台中に於ける演奏会のため二十六日から四月一日に亘る一週間の台湾旅行をして、琵琶をはじめとする邦楽の真面目な遺憾なく発揮し大きな効果を挙げた。この旅行記は紙面の都合で次号に詳報する。

武絃会。一水会多摩支部合同研修会

三月七日(日)昼一時小金井市福祉会館。恩讐の彼方へⅠ工藤慈水 白虎隊Ⅰ小山羽水 俊寛Ⅰ篠宮優水 桜狩Ⅰ石井效水 伊豆の御難Ⅰ中村修水 桜花Ⅰ松田殊水 村上喜剣Ⅰ伊藤馨水 吹雪の敵Ⅰ高杉洲靖 武蔵野方丈記Ⅰ伊集院鼓城 滝口恋慕編Ⅰ坂本錦道。以上研修を終り六時解散した。

日本芸術琵琶三月例会

三月二十一日(日)昼一時東京西新宿柏ビル六階。伴流能勢西田風謡切六、七弾法Ⅰ山崎錦幽 石童丸Ⅰ佐藤ミツ 湖水乗切Ⅰ原島晴州竜の口Ⅰ狩野窪さん 敦盛Ⅰ杉山雅俊 須磨の春Ⅰ高田瑩水 勸進帳Ⅰ石田脩水 平家物語朗読Ⅰ雨宮映月 未練四行Ⅰ若宮旭登。以上演奏を終り小宴の後八時散会した。尚四月例会は十八日(日)昼同所にて開催の予定。

晴風会弥生例会

三月二十七日(土)夕六時Ⅰ九時東京杉並区高円寺会館(五〇〇円)。噺八甲田山Ⅰ諸遊清風 河内の宿Ⅰ菅野青仙 城山Ⅰ太田尾青桜常陸丸Ⅰ岩崎青竜 設楽ケ原Ⅰ本橋錦風 菅公Ⅰ中山礼子 名残の桜Ⅰ野口嶮水 吉野落Ⅰ福島脹水 本能寺Ⅰ大関英子 敦盛Ⅰ杉山雅俊 月下の陣Ⅰ望月啞江 羅生門Ⅰ山崎典水 景清(上)Ⅰ山下晴楓 同(下)Ⅰ会長浅野晴風

三位研修同志会三月例会

三月二十八日(日)昼一時三鷹市公会堂。吹雪の敵Ⅰ富田勝雄 端歌二題Ⅰ中村晃憲 菅公Ⅰ八束一峰 乞食瓢Ⅰ坂本錦道 川中島Ⅰ小山羽水 小松の操Ⅰ鈴木鶴岡 旅順開城Ⅰ田戸桜丸 桜狩Ⅰ篠原操水 老蘇の森Ⅰ伊集院鼓城 平将門Ⅰ伊集院牙城。以上演奏後八東氏持参のテープ平家琵琶、荒神琵琶外数点の古典録音を鑑賞、歓談の後散会した。

京都琵琶協会四月定例会茶話会

春酣の四月四日(日)昼一時本部平井春嶺氏宅で開催。暫く顔を見せなかつた静養中の伊吹正陽、峰口高昇両氏を始め平井、荒木旭媛、古谷寛水、牧南水、矢吹旭美津、梅原旭濤、田中鵬水、戸田旭公、植村寛水の諸氏出席、